英会話道場イングリッシュヒルズ
英語道弟子課程・弟子 M.U.

生井利幸(先生)事務所社会貢献事業
クラッシック音楽鑑賞会

2017年1月19日(木)

◆ 鑑賞音楽

ルードヴィヒ・ヴァン・ベートーヴェン
交響曲第5番ハ短調作品67

◆ 鑑賞場所

生井利幸(先生)事務所銀座書斎
芸術鑑賞室(奥の聖域)

こちらの作品は、生きる上での本質的生き方に
到達するための経験が表現されている。
人間の生き方を教えてくれている

「生」の本質

本質・真理に到達するためには、狭い門を通る必要がある。

奥の聖域へは、太陽系の惑星の一つである地球に存する
一個の弟子として、本質・真理探究への real gate を
見つけるという見識で、慎重に、且つ、ゆっくりと進むこと。

生井先生が、ご自身の公式サイトの方に、クラッシック音楽鑑賞会の告知を掲載して下さるたび、私は「聴かせていただきたい」と思っていた。しかし、その機会をいただけた場合にかかる生井先生の貴重なお時間、労力を考えると、聴きたい旨をご相談させていただくことに躊躇してしまっている自分がいた。鑑賞させていただきたい旨を素直にご相談させていただいてよいものなのか、それは欲なのか…未だわからずにいる。けれど、今回は、恐れながらも、鑑賞希望の旨をお伝えした。

生井先生は、朝のレッスンを終えた直後に、その時間を設けて下さった。3コマ目である英語稽古では、特殊講義の後、一旦、ボイスレコーダーを止め、再度いくつもの講義を行って下さるという形で進められた。そして、そうした英語稽古の直後、ベートーヴェン交響曲第5番鑑賞のご準備を行って下さるため、生井先生はお席を立たれた。

今回、ご準備いただいている時間をとても長く感じた。これまで奥の聖域にて賦与していただいてきた特別稽古の時よりも、ずっと長く感じた。これは、気持ちとして長く感じたのではなく、実際、生井先生は、部屋の照明を消したり点けたり、また、レッスン用のテーブルからは見ることはできないが、様々な音から、先生が入念に微調整して下さっていることが伝わってきた。

これも毎回のことなのだが、準備が整い、私が移動する際、そのためにだけ照明をつけて下さるというご配慮をいただいている。

直前にあれほどエネルギーを消耗…いや、先生の命を削り、
英語稽古を行って下さった直後であるにもかかわらず、
先生は、ごく自然にご準備くださっていた。
「特別講義を受けるつもりで作品と向き合う」という
思いで臨んでいた私の心は、先生のそのお姿から
さらに引き締まった。

ゆっくりと歩みを進め、聖域の入口に辿り着いた。
その入口はとても狭かった。これまで以上に狭く思えた。
そして、中へ入らせていただき全体を見たとき、
広大な世界、普遍的な世界、生井先生の精神性の球体、
生井先生の理性性の球体、英語道弟子課程の精神と
いったものが頭に浮かんできた。そして、これら全ては
同じものであるから、自分自身を身ぎれいにすることが
何よりも重要なのだと、改めて感じた。

今回の作品には、私の求めていた音が、第4楽章の
最後の最後まで入っており、生井先生が私のために
入念にお選び下さったのだと、感謝の思いが
あふれてきたと同時に、そのように行って下さった
先生の思いを、厳粛に受け止めなければならないと、
背筋が伸びた。

今回、第一楽章では、困難の中にいる、まさに、
ベートーヴェン自身の魂の声・音・叫びのように聞こえた。

ローカルな枠の中にいたのでは何も見えてこない。
目を覚まし、厳しさの中、困難の中に身を置くこと。
自分自身を厳しく律する、節制する。
すると、いつの日か光がさしてくる！
けれど、それはまだプロセス。
すぐにまた真っ暗闇の中へ入ってしまう。
一生涯の使命として、困難の中に身を置くこと。
前進するためには、それしか方法はない。

今回、鑑賞をさせていただいている途中、
生井先生は、一度、銀座青南のドアから出られた。
自分たった一人、奥の聖域に身を置かせて
いただいていた私は、急に心細さや孤独を感じた。
崇高な世界に無知な自分が放り出されてしまった
ように思えたから。けれどそこで、「強くなろう」、
「前へ進もう」、「生井先生について行こう」という声が
私の深い部分から聞こえてきた。